名古屋宝生会 桃華能（ももはなのう）

名古屋能楽堂

令和六年三月十七日（日）
十三時始（開場十二時）

藤栄（とうえい）
内藤　飛能

右近（うこん）
衣斐　愛

撮影/工房円

入場券料（税込料金）（全自由席）

鑑賞券 5,000円（税込）※各回1回限り
学生券 2,000円（税込）※各回1回限り
※中学生以上30歳以下の学生
セット券 9,000円（税込）（3月・11月各回1回限り）

名古屋宝生会公式ホームページ
名古屋宝生会
@nagoyahoshokai

●入場の際には、受付にて入場券をお渡しください。
●上演中の写真撮影、テープレコーダー、携帯電話等のご使用及び、演能やほかのお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。
場合によっては退場していただくこともございますのでご了承ください。

鑑賞に役立つ**イヤホンガイド**（使用料500円）と**能楽師による演目解説**（12時半開始）により
初めての方でもお楽しみいただけます。

主催／名古屋宝生会　後援／名古屋市・（公財）名古屋市文化振興事業団・中日新聞社

演者紹介

衣斐（いび）　愛（あい）
右近　シテ

Q1 能「右近」の見どころは？

A 前半は、花見車の作り物に乗った高貴な女性が、鹿島の神職と会話を交します。会話の内容よりは、桜満開の右近の馬場、北野の景色、桜葉の神さまをクローズアップしています。曲の後半は、桜葉の神が爽やかに中之舞（藤田流では草之神舞）と破之舞を舞います。[脇能]といえば高砂や養老などに登場する男神がスカッと神舞を舞うイメージが強いのですが、桜葉の神は女体です。男神の登場する曲と異なり、優雅さ、華やかさを以て、太平の御代を言祝ぐ[脇能]を作り上げることが、この曲の魅力であり、難しいところでもあります。物語を追うよりも、桜満開の景色を思い浮かべながら舞台の上をご覧頂きたい曲です。

Q2 この曲に対する思いについて

A 右近の馬場とは「右近衛府の馬場」のことで、右近衛大将、菅原道真に好まれたそうです。また、桜葉の神は、北野天満宮の末社に祀られています。今や受験生のパワースポットとなっている北野天満宮といえば、道真公、梅の花、なで牛など。能は、マイナーな人や物語を取り上げることが多くあります。不行而知名所一行かずして名所を知る。「右近」に向き合うことで、表舞台では見えてこない北野の魅力を知りました。

Q3 演能に際してひと言

A 名古屋宝生会は68年目、新体制となって3年目です。そして、私自身はいよいよ50代に突入しました。40代は若手と言われる能楽界において、中堅に差し掛かって参りました。各地の宝生流能楽師の力を結集させ、今年もよりよい演能の場を作り出して行く所存です。

1973年愛知県生まれ 重要無形文化財総合認定保持者。東京芸術大学卒。名古屋を中心に活躍。つぼみ会・逢の会を主宰。名古屋市在住。
http://ai-no-kai.com/
@ainokaiibi

内藤（ないとう）　飛能（とびよし）
藤栄　シテ

Q1 能「藤栄」の見どころは？

A ワキの最明寺殿（北条時頼）が人々の声を直接聞くために身分を隠して諸国を巡り、悪事を見つけたら、正体をあかし世を正すという所です。「水戸黄門」のような時代劇を連想させます。またツレの鳴尾と立衆が登場する時の謡、通称「根白節」は複雑な節扱いかつ地謡との掛け合いが難しいのですが、聴く者を楽しませる工夫があります。見どころというより、聴きどころです。

Q2 この曲に対する思いについて

A 藤栄は兄が亡くなりその子ども月若の所領を横領している悪い叔父さんです。贅沢をし、お酒を友と酌み交わす能の主人公にしては珍しい役柄で「男舞」「クセ舞」「鞨鼓」と場面に応じて舞を舞い、演じるのは難しく感じます。最後は最明寺殿に打ち首ではなく、月若を支えよと命を受け、その後一族皆々繁栄しましたとハッピーエンドで終わるのは好きな所です。

Q3 演能に際してひと言

A 子方の月若を勤める長男瑞駿（みずはや）は4月から小学4年生になります。また私は昨年令和5年度、重要無形文化財総合認定保持者に認定されました。親子共々一層芸道に精進いたします。今後もかわらぬ御声援を宜しくお願い申し上げます。

1980年愛知県生まれ 能楽師・内藤泰二の孫 名古屋市立向陽高等学校、東京藝術大学卒。名古屋 宝生会同人／個人演能会「飛座」／同門会「飛雲会」主宰／名古屋大学宝生会指導／ 2022年豊田市文化 奨励賞受賞

Supporter 名古屋宝生会サポーター募集のご案内

名古屋宝生会では「サポーター」を募集しています。セット券をご購入いただくとサポーターにご入会いただくことができます。名古屋宝生会の護持発展のため、是非ご入会ください。詳しくは別紙ご案内、または名古屋宝生会ホームページご覧ください。

名古屋宝生会桃華能同日開催
第三回 東海宝生流能楽まつり
日時　令和6年3月17日（日）9時半開始　入場無料

東海地区で宝生流に携わるグループと、宝生流の稽古をしている学生、子どもたちが集まり、日頃の成果を発表します。

次回の予告

第2回
名古屋宝生会「雪待能」
令和6年11月17日（日）13時始

【能】
楊貴妃　シテ　衣斐　正宣
玉簾

【能】
女郎花　シテ　和久荘太郎
ツレ　石塚　尚寿

他　仕舞・狂言

名古屋能楽堂（名古屋城正門前）
TEL052-231-0088　名古屋市中区三の丸1-1-1

お問い合わせ・入場券取り扱いは、出演能楽師、または下記まで。

名古屋宝生会　TEL/FAX 052-889-3430
メール nagoyahoushokai@castle.ocn.ne.jp
〒466-0051 名古屋市昭和区御器所2-13-22-202　坂口方

プレイガイド（鑑賞券のみ取扱い）：芸文（地下2F）／栄プレチケ92（栄地下街16番出口）／名古屋市文化振興事業団（ナディアパーク8F）

名古屋宝生会 オンラインチケットサービス　https://www.nagoyahosho-kai.com/

Confetti（カンフェティ）　カンフェティチケットセンター　0120-240-540（受付時間 平日10:00～18:00）

番組

令和6年3月17日(日) 13時始

12時30分 解説 和久荘太郎

13時

【能】右近
- ツレ 坂口 侑
- ツレ 内田 朝陽
- シテ 衣斐 愛
- ワキツレ 高安 受壽
- ワキ 橋本 宰
- ワキツレ 椙元 正樹
- 大鼓 河村眞之介
- 小鼓 船戸 昭弘
- 太鼓 加藤 洋輝
- 笛 鹿取 希世
- 地謡 太田万寿美 葛野 りさ / 松浦 祥子 柏山 聡子 / 阪口 泰子 広島栄里子 / 犬塚 惠 武田 伊左
- 後見 和久荘太郎 / 亀井 雄二
- 問 鹿島 俊裕

休憩15分

【仕舞】
- 箙 和久荘太郎
- 小塩 キリ 髙橋 亘
- 地謡 亀井 雄二 / 衣斐 正宜 / 澤田 宏司 / 石塚 尚寿
- 網之段 玉井 博祐
- 野守 柏山 聡子
- 地謡 武田 伊左 / 広島栄里子 / 葛野 りさ / 坂口 侑

休憩15分

【狂言】鶯
- シテ 佐藤 友彦
- アド 今枝 郁雄
- 後見 鹿島 俊裕

休憩15分

【能】藤栄
- シテ 内藤 飛龍
- 子方 内藤 瑞駿
- 鳴尾 衣斐 正宜
- 立衆 石塚 尚寿
- 立衆 石森 智幸
- 立衆 能勢 渉
- ワキ 飯冨 雅介
- ワキツレ 橋本 宰
- 大鼓 河村裕一郎
- 小鼓 後藤嘉津幸
- 太鼓 加藤 洋輝
- 笛 山村 友子
- 地謡 野田 耕治 / 清水 達郎 / 近藤 徳男 / 鈴木久仁七 / 澤田 宏司 / 高橋 亘 / 和久荘太郎 / 亀井 雄二
- 後見 衣斐 愛 / 内田 朝陽
- 問 井上 蒼大 / 井上松次郎

16時40分 終演予定

【能】右近 ［うこん］

鹿島の神職、筑波の何某(ワキ)は花の名所を見物するために都に上り、北野天満宮の右近の馬場の桜が満開と聞いたのでさっそく訪れます。そこへ花見車に乗り桜見物をする上臈(前シテ)と二人の侍女(ツレ)と遭遇します。神職は「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日や眺め暮らさん」(見たこともない知らない人だが恋しさのあまりぼんやり一日を暮してしまうでしょう)と在原業平が詠んだ歌を口ずさみます。女は「知る知らぬ何かあやなくわきていわん思いの身こそ知るべなりしを」(知っているか知らないかは関係なくその思う心こそ大事である)とその時の返歌を口ずさみ、共に花見をするのでした。神職が社の縁起を尋ねると、女は実は自分は北野天満宮の桜葉の神で晴れた夕空に月が出たら神楽を奏でましょうと言って花陰に消えて行きます。神職が待っていると桜葉の神(後シテ)が現れ君の尊い威光を称え、月に照り映えて美しい舞を舞いやがて雲の羽風に吹かれて天上に上って行くのでした。

右近の馬場は北野天満宮の一の鳥居から東門に至る境内の一部です。嵯峨天皇の時代大同二年、右近衛大将であった菅原道真公が好まれたので右近衛府の馬場、俗に右近の馬場と言われるようになり当時から桜の名所として親しまれて来ました。

【仕舞】箙 ［えびら］

梶原景季の霊(シテ)が生田の里にて梅の枝を箙(矢を入れる筒)に挿して合戦の様子を現し、あとの弔いを求め消えて行きます。

【仕舞】小塩 キリ ［おしお］

在原業平の霊(シテ)が京都大原小塩にて恋多き「昔男」と呼ばれた若かりし日の姿で現れ美しい舞を舞い明け行く春の朝霞と共に消えて行きます。

【仕舞】網之段 ［あみのだん］

桜子の母(シテ)は生き別れた我が子を捜す放浪の旅の途中、川に流れる桜の花びらを網を使い掬い集めようとします。子供の名前に因む桜の花びらが徒に流されるのを嘆き桜子に思いを寄せるのでした。能「桜川」より

【狂言】野守 ［のもり］

春日の里にて鬼神(シテ)が善悪を正す「明鏡」を携え東西南北の神仏や、天界の頂点から地獄の底まで隈なく映し出し、大地を踏み鳴らして奈落の底へ帰るのでした。

【狂言】鶯 ［うぐいす］

鶯の飼い主(アド)が野に出て鶯を鳴かせている所に、梅若殿の家来(シテ)は梅若殿に差し上げるための鶯を捕まえにやって来ます。籠の中で美しく鳴く鶯を所望しますが秘蔵の鶯だからと、いい返事をしません。そこで家来は持っている太刀を賭けて、とりもちを塗った竿で鶯を捕まえる事が出来たら貰おうと勝負を提案し挑戦しますが失敗します。家来は2回目に挑戦するのか結末はいかに・・・。

【能】藤栄 ［とうえい］

最明寺時頼(ワキ)は修行僧の姿となって西国に下り摂津の国、芦屋の里に辿り着き、粗末な宿に一晩泊まる事にしました。この宿の幼い人(子方・月若)が如何にも気高く見え、ただの子とは思えないので宿の者(ワキツレ・月若の家人)に尋ねた所、芦屋の里の先代の領主、藤左衛門殿の御子息であると答え、叔父の藤栄(シテ)に所領を横領されこのように零落していると語るのでした。藤栄の非理に憤慨した最明寺公は、一宿の御縁に月若を再び世に立てる事を約束します。舟遊びに出掛けた藤栄は鳴尾(ツレ)達一行と盃を交わし舞に興じています。驕れる藤栄に対し最明寺公は笠で顔を隠しながら今度は鞨鼓を打てと大胆にも要求するので、藤栄は無礼な修行僧だと八撥を打つ振りをして最明寺公の笠を打ち払おうとします。最明寺公はついに名乗りをあげ、驚く藤栄を十分に懲らしめ、所領を返し、月若を総領として立てて、一家繁栄に勤めよと重ねて命令し政道の正しさを示したのでした。月若は本宅に戻り総領を始め、兄弟も栄え一族は皆限りない栄華を得たのでした。

最明寺時頼は鎌倉幕府五代執権北条時頼の事で修行僧の姿での諸国巡視を仕組んだ一曲です。従ってこのワキは位も高く極めて重要な役まわりといえます。他に「いざ鎌倉」をテーマにした能「鉢木」にも登場します。

Column 『羯鼓(かっこ)について』

能「藤栄」では、曲の中でシテが後見座に行き、羯鼓を腰につける場面があります。

羯鼓は直径が25センチほどの小型の鼓で、全体が金色で、皮の面には美しい絵が施され、オレンジ色の調べ(紐)が掛かっています。

能における「羯鼓」の使用の仕方は、大きく二つに分けられます。

○登場人物が身につける
○作り物として使う

登場人物が身につける時は、下腹辺りに、皮の面が左右になるよう、羯鼓についている調べを腰に巻きつけ、結んで固定させます。笛が奏でる「羯鼓」の旋律に乗せ、二本の撥で羯鼓を左右から打つ型をしながら舞います。音は鳴らしません。

この格好をする曲は「花月」「自然居士(じねんこじ)」「東岸居士(うがんこじ)」「藤栄」「放下僧」「望月」の6曲です。「望月」のみ子方が、そのほかの曲はシテが舞います。

「花月」「放下僧」「望月」は、羯鼓の最初、撥を2本重ねて右手で持った状態で序盤の「掛り」を舞い、そこから撥を両手に分けて持ち、羯鼓を打ち始めます

「自然居士」「東岸居士」「藤栄」の羯鼓には掛りが入りません。

羯鼓を作り物に使用する曲は「梅枝」「富士太鼓」「天鼓」「鳥追」の4曲です。

「梅枝」「富士太鼓」「天鼓」は羯鼓台と呼ばれる作り物を舞台正先に出します。竹の枠組みに白い包地を巻き付けて形を作り、紅段と呼ばれる赤い布で作り物を飾り、その上部に羯鼓が固定されています。「梅枝」は、羯鼓台の中程に横向きの棒を渡し、そこに装束を1枚かけます。

「鳥追」は「鳥追船」という、独特の形をした作り物を使用します。船弁慶などに使われる船の作り物に棒を立て、そこに笹と鳴子を結びつけ、さらに羯鼓もつけます。鳥追船は、田んぼを荒らす鳥を追い払うためのもので、曲中、子方が羯鼓を打つ型をします。

本日の能「藤栄」のシテは曲の途中、後見座で羯鼓をつけ、その際、直垂の長い袖を「絞上げ」というスタイルにします。藤栄でしか見られない独自の出立です。

「花月」

「梅枝」

「鳥追」